



巻頭言

作業の視点は，作業療法の可能性を広げる

作業の視点を用いて，個人や社会を見ることで作業療法の可能性はもっと広がる。

米国では約一億人が慢性疼痛を抱えており (AAPM, 2016)，USC (南カルフォルニア大学) では Well Elderly Study の成果を基盤とした Lifestyle Redesign®を用いて，この慢性疼痛を始め，肥満，糖尿病の人々へと対象を広げ作業の視点を用いた実践を行っている。

作業療法士は，対象者一人一人の作業に注目し，ストーリーテリングや作業自己分析などを用いて作業従事，習慣，役割，ルーチンを理解する。その後，対象者とともにデイリールーティン，タイムマネジメント，ライフバランスの視点を用いて，健康的な習慣や活動に従事できるよう自己決定を促す。作業分析，学習，ダイナミックシステム理論などを用いて，クライアントの生活が好循環になるよう促す。例えば慢性疼痛の場合は，痛みとともに抑うつ状態に陥り，自己のペースを失い，痛みを増加させ，活動制限に陥り，社会的な孤立に陥るという悪循環になる。好循環では，作業のペースやエネルギーの保護を学び実行することで，自己効力感は増加する。気分が良くなることで痛みの軽減を促し，再度，作業に従事するようになり，QOLは向上する (Chantelle Rice, 2016)。作業療法士が，クライアントの作業を深く見つけ，協業し，再構成することで，健康へと導くことができるのだと思う。

一方で，個人のコントロールからかけ離れ，態度，社会，人種，政治的な影響により，人々が必要かつ意味のある作業に従事できない作業剥奪の考

発行年月日 2016年10月14日

発行者 日本作業科学研究会広報係

ウェブサイト <http://www.jssso.jp/>

え方がある。オーストラリア作業療法協会では，作業剥奪における作業療法士の役割について，積極的な対応と状況を理解するために関連機関や作業剥奪を経験している人々との協業を図ること，作業剥奪による負の影響の軽減や作業を最適な状況にするためのプログラムをデザイン，開発，提供すること等を挙げている。また作業剥奪に陥る可能性のあるグループとして低所得者，失業者，ホームレス，難民などを挙げている (Occupational Therapy Australia, 2016)。

現在，日本における「子どもの貧困率」(17歳以下)は 16.3%であり，「子どもがいる現役世帯」のうち「大人が一人」の世帯員では「子どもの貧困率」が 54.6%となっている (厚生労働省, 2013)。この貧困世帯の子どもたちは，あたり前に行えるはずの，学ぶこと，遊ぶこと，食べることが保障されているのだろうか？日本では，他にも，非正規雇用，保育園待機児童，外国人労働者など，多様な課題を抱えた人々がいる。これらの人々は健康的な暮らしを送っているのだろうか，それとも作業剥奪の状態にあるのだろうか？疾病，障害にとどまらず，作業の視点で様々な人や社会をみることで，作業療法士のできることを，やるべきことはもっとあるのではないだろうか。

第20回作業科学セミナーのテーマは『社会の課題を作業のレンズで捉える』である。セミナーを通じて，作業の視点が広がり多くのアイデアが生まれる事を願う。

・ American Academy of Pain Medicine. (2016). AAPM facts and figures on pain. Retrieved August 20, 2016 at:

http://www.painmed.org/patientcenter/facts_on_pain.aspx#chronic

・ Chantelle Rice(2016). Lifestyle Redesign USC Occupational Therapy Faculty Program. In SOTI Program 2016 Handout.

・ Occupational Therapy Australia,(2016). Occupational Therapy Australia position papers: Occupational deprivation. Retrieved August 20, 2016 at:

[http://www.otaus.com.au/sitebuilder/advocacy/knowledge/asset/files/21/positionpaper-occupationaldeprivation\[april2016\]-occupationaltherapyaustralia.pdf](http://www.otaus.com.au/sitebuilder/advocacy/knowledge/asset/files/21/positionpaper-occupationaldeprivation[april2016]-occupationaltherapyaustralia.pdf)

・厚生労働省(2013). 平成 25 年 国民生活基礎調査の概況. Retrieved August 20, 2016 at:

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa13/>

(西方浩一, 文京学院大学保健医療技術学部)

研修会 実施報告

作業科学にまつわる研究法研修会

2016年5月21、22日の2日間、広島大学にて「作業科学にまつわる研究法研修会」が開催され、全国から32名の方が参加されました。研修会は、初日の講義では「作業科学とは何か」(渡辺慎介, 専門学校YICリハビリテーション大学校)で作業科学の基礎や歴史について、「研究とは何か」(酒井ひとみ 関西福祉科学大学)では研究の意義や研究に必要な知識, 研究疑問の設定の仕方や研究の種類(量的、質的)について、「作業科学研修の文献の読み方」(近藤知子 帝京科学大学)では、実際の論文を複数例に出され研究論文を読む際の着眼点や読み込み方についてお話しがありました。2日目は「作業科学研修の進め方」について首都大学東京のボンジェ・ペイター氏に自身の博士課程の研究を通してお話し頂きました。この研修会では毎回、博士論文執筆者による解説を聞くことができ、これは他では聞けない研究の思考過程や手法を具体的に学ぶことができる貴重な内容です。2日目の後半は研究の進め方について参加者から提出された事前アンケートの話題を通し

て2つのグループに分かれてディスカッションを行い、大変盛り上がりました。

参加者の中には臨床家、大学院で研究をすでに始めている人、養成校の教員など様々な立場の人があり、作業科学についての理解や深度も人それぞれでしたが、参加者のアンケートをみると復習や確認になるところ、研究についての整理ができるところなど、それぞれの立場で得るものがあつたと好評でした。1日目の夜に行われた懇親会にも多くの方が参加して交流を深め、ぜひ研究をはじめてみたい!という人も沢山おられました。私自身は今回で2回目の参加となり、1回目は一参加者として、2回目の今回は委員の一人として参加しましたが、参加者の感想にもあつたように、その時々自分の知識や状態に合わせて学ぶべき内容が沢山あり、研究に目を向けることの意義や臨床疑問を研究疑問に落とし込む考え方などを学ぶことができ、何度参加しても意義のある研修会だと実感しています。これからも、より多くの作業療法士の皆さんに参加して頂き、作業科学研究の発展に寄与してもらいたいと感じています。

(中塚聡, 諏訪共立病院)

て、自分の人生を歩んでいく過程を考えると、「クライアントの人生は、人から選ばれるのではなく、クライアント自身が自分で選ばなくてはならないから、結構辛い立場にあることを知っておかないといけないなあ」という感覚を思い起こすことができました。

作業療法士は、クライアントがありのままに生きていくことをお手伝いするだけかもしれないと

いう、当たり前のようですが、とても大切な考え方を再確認できた時間でもありました。

作業科学に出会えて、本当に良かったと感じています。研究の視点と研究の作法を、これからはもしっかり身につけていこうと思います。

(鈴木誠士，下関リハビリテーション病院)

第20回日本作業科学セミナーのご案内

実行員委員長 愛知医療学院短期大学 堀部恭代

2016年12月3日(土)，4日(日)に愛知県東海市にて第20回作業科学セミナーを開催します。おかげさまで、事前登録者数が100名を超え(9/15現在)、また多くの演題申し込みをいただいています。参加申し込みをいただいた皆様、演題を登録して下さった皆様には心よりお礼申し上げます。事前参加の申し込みを11月11日(金)まで受け付けていますが、あまり余力の無い会場ですので申し込みがお済みでない方はお早めにお手続き下さい。

さて、今回の作業科学セミナーは「作業のレンズで社会の課題を捉える」をテーマにしています。作業科学の視点をもって、ものごとを見つめることを“作業のレンズ”で捉えると表現することがあります。“作業のレンズ”を通して社会を見つめると、大切な作業が行えていないひとの存在や、ひとと作業を離そうとする力が存在しているなど、社会に様々な課題があることに気がきます。

これらの課題はひとの健康に大きな影響を及すにも関わらず、気付かれにくく、私たちの直ぐそばで、そして世界のあらゆる場面に存在しています。今回のセミナーは社会が抱える課題について皆様と共に理解を深め、さらには課題に対して一人一人ができることを模索する場にしたいと思っています。

基調講演の講師ではダルハウジー大学のエリザベス・タウンゼント先生をお招きし作業的公正についてご講演をいただきます。また、関西福祉科学大学の酒井ひとみ先生(佐藤剛記念講演)、県立広島大学の吉川ひろみ先生(20周年記念講演)、日本社会事業大学の倉持香苗先生(特別講演)をお招きしています。どなたも豊かな作業の知識を提供して下さる素晴らしい講師ばかりです。

作業科学は我々に今までにないものの見方を提供してくれます。それが作業科学の大きな魅力であると感じています。作業科学の視点から社会が抱えている課題を見つめ直し、より良い社会の実現に向けた一歩を、ここ愛知から踏み出しましょう！

実行委員一同“名古屋めし”を用意して皆様のお越しをお待ちしています！！

2015年度 (2015. 7~2016. 6) 第2回日本作業科学研究会理事会 議事録

日時: 2016年6月1日~7日 方法: メール会議

参加者: 吉川, 小田原, 近藤, 渡辺, ボンジェ, 西方, 酒井, 古山, 村上, 齋藤

【報告】

1. 役員と委員の確認

2. 機関誌

第8巻 HPへの掲載済. 第9巻2015. 12に発刊・発送済.

第10巻2016年度中に発刊予定. 10周年記念誌とする.

次号から前年度のOSセミナーのテーマを毎号のテーマとする.

投稿論文は現在4編投稿があるが採択予定は1編

3. 第20回OSセミナー

2016年12月3・4日, 東海市芸術劇場. テーマ「作業のレンズで社会の課題を捉える」

6月初旬HPアップ予定(演題募集, 事前申し込み開始)

準備金として事務局より10万円振り込み

4. 第4回作業科学研究法研修会報告

2016年5月21・22日, 広島大学.

参加者1日目 28人(会員24, 非会員4) 2日目 28人(会員25, 非会員3)

5. JOS抄録翻訳を掲載

2016. 4. 18 『最も読まれている論文と最も引用されている論文』

2016. 5. 16 Volume 22, Issue 2, 2015
Volume 22, Issue 3, 2015

6. ニュース

日本作業科学研究会ニュースをH27. 9. 19 第18号, H28. 2. 11 第19号を発行, HPに掲載.

7. ホームページ, メーリングリスト

1) ホームページ管理運営: 勉強会組織の案内を掲載, Facebookを作成, 情報更新.

2) メーリングリスト管理運営: Facebookをリンク<https://www.facebook.com/JSS02006/>

8. 事務局

1) 2016年度の会費納入を促す内容をHP掲載. 会員に会費納入依頼メール送信.

2) 出席者半数以下のため日本作業療法学会(9月)時の理事会開催を中止.

【審議事項】

1. 広報について

1) 研究会の企画をまとめたチラシ等を作成して発信する件について

→研究会の企画をまとめて広報することは賛成だが, 誰が作成するか, どの内容を盛り込むかの検討が必要. 関連する人が作成して共有し, 随時更新していくというのはどうでしょうか

2) 研究会企画のチラシを紙媒体で郵送することについて

→まずウェブで共有して, 拡散することでどうでしょうか. 郵送は予算と合わせての提案することにしましょう.

3) 発信先に養成校, 大学院を含むことについて

→賛成. まず費用がかからない方法を検討したらどうでしょうか. たとえば, 役員が知っている教員のメールアドレスに送付するだけでもかなりの広報効果はあると思います.

4) 各理事がFBの研究会のページに書き込むことについて

→: FBに馴染んでいる理事(西方, ボンジェ, 村上, 吉川, 渡辺)は次の方法で書き込む. Facebookアカウントを持っている方は「いいね」を押す. 「シェア」をしてください. 情報が拡散します. こちらで編集者として「いいね」を押してもらった方は登録してあります.

各理事が作業科学に関する研修会や講演などに携わった際に情報をアップしてもらえればと思います。個人アカウントとは別に日本作業科学研究会のアカウントでアップすると研究会ページに「いいね」を押している人に情報が流れます。作業科学に関する研修会講師などを務める場合も案内をFacebook, HPに掲載する。

2. 投稿促進について

→システムを明確にするために、次回理事会で提案する。

3. 啓発・国際情報について

1) JOSの抄録を翻訳でなく、掲載論文のレビューの形式で掲載する。

→担当者を募集して実施する。

2) World Occupational Science Conference
担当者

→小田原さんをお願いする

4. 実践につなげる研修開催延期と委員増員

→28年度の研修を平成29年6～7月頃に開催(延期)し、委員を増員する。

5. 前回理事会でのビジョンを反映した活動の整理

→ビジョンを意識して活動を展開する

→OT教育での取組みとOT向け研修について情報を共有する(意見集約表参照)

6. 会員意見の反映

→各企画でのアンケート結果を共有する。

→オンラインアンケートを検討する、機関誌発送時に質問紙を同封する、研修会の一部として企画するという案がある。

7. 今後のセミナー候補

1) 第21回セミナー

→大阪で酒井さん、長野で中塚さん、茨城で齋藤さん

2) 第22回セミナー

→東京でボンジェさんと西方さん、長野で中塚さん、茨城で齋藤さん

8. 次回理事会について

→参加できる理事が過半数(現在参加予定は、古山、酒井、吉川、渡辺。未定の青山、近藤、ボンジェの内2名以上)であれば、日本作業療法教育研究学術集会(仙台)10月2日9時前に開催する。

9. 学生会員について

→年会費1000円で、大学院生を含む(9名中6名の意見)。理事及び監事の立候補権はない。

10. 役員選挙について

→投票日の60日以前(10月3日)選挙公示、40日前(10月24日)立候補締め切り。現理事10名中7名が次期立候補予定。監事を元理事に依頼する予定あり。継続審議。

(ニュース編集担当 村上典子 西野歩)